まえがき

本書は、中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系を中心的に扱った研究書である。このテーマを扱った研究書としては、国内外を見ても、おそらく本書が初めてのものではないかと思う。

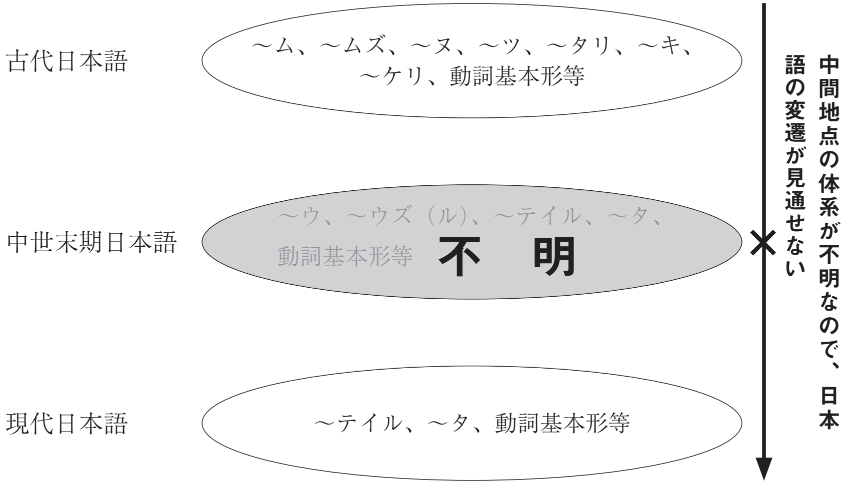
日本語に非常に大きな変化があったことは、よく知られている。テンス・アスペクト・モダリティに関して、概ね、中世を境に、「〜キ、〜ケリ、〜ツ、〜ヌ、〜タリ、〜ム、〜ムズ」等といった、古代日本語（『源氏物語』等の言語）の形式が、ほぼ全て姿を消し（あるいは形を変え）、かわって、「〜タ、〜テイル」等の近代日本語の形式が台頭してくる。

本書が研究対象とする中世末期日本語とは、概ね、西暦 1550 〜 1600 年前後の日本語（主に口語）のことである。この時代には、〜タや〜テイル等の形式が盛んに用いられるようになっており、この意味で、まさに、「近代日本語のスタート地点」ともいえる言語である。一方、〜ムや〜ムズの後継の形式である、〜ウや〜ウズ（ル）も盛んに用いられており、この意味で、古代日本語の面影を色濃く残している言語でもある。時期的にも、古代日本語と現代日本語のほぼ中間に位置する言語であって、日本語の変遷を考える上で、極めて重要な言語であるといえる。しかし、そのテンス・アスペクト・モダリティ体系は、実は、よく分かっていないのである。

例えば、現代日本語では、動詞基本形（スルの形）と〜テイルとで、「非状態（完成的）／状態（継続的）」の対立を成している。具体的に述べると、「走る／走っている」のような対立がアスペクト体系を形成しているのだが、これと同様のことが中世末期日本語でいえるのだろうか。また、現代日本語では、〜ウや〜ダロウ等がモダリティの形式として扱われ、動詞基本形との関係が議論されているが、中世末期日本語において、〜ウ等と、動詞基本形とは、どのような分布を成しており、どのような体系を形成しているのだろうか。従来の研究では、これらの問いに明確に答えることはできない。

この段階で回答できないわけだから、「〜ウ・〜ウズ（ル）、動詞基本形、〜テイル、〜タ」の各形式が、どのように分布しており、どのような体系を形成していたのかと問われても、もちろん、回答できない。

このため、近代日本語の体系の発達が、どのようであったのかを把握することもできず、さらには、古代日本語から現代日本語への変遷が、どのようなものであったのか、全体を見通すことも難しい。分かりやすく示すと、次のような状況なのである。



この不明な部分を知りたい。これが本研究の動機である。この部分が分かれば、全体の見通しもすっきりするではないか。なまじ使用されている形式が分かっているだけに、はっきりしないことが余計もどかしい。

本書は、この不明な部分を明らかにするものである。本書の内容は多岐にわたるが、その中心的な部分を端的に述べれば、この一点に尽きる。

【古典文学に興味がある方や、敬語に詳しくなりたい方へ】

本書は、歴史的な文法の専門書であるが、古典文学に興味がある方や、敬語に詳しくなりたい方にも、是非、読んでもらいたい。例えば『平家物語』等の主な丁寧語は「候ふ」であり、この語は古文の読解上、重要である。では、丁寧語の「候ふ」は、現代日本語の丁寧語である「です・ます」と、どう違うのだろうか。両者の違いを整理して答えることは難しい。しかし、本書の第9章と第10章を読むだけでも、両者の違いがはっきりと整理できるようになるだろう。共に、丁寧語とされてきた、「候ふ」と「です・ます」だが、実際には大きな違いがある。当該の章だけでもよいので、是非とも読んでもらいたいと思う。

【古典文法がよく分からなかったという方や、国語教育に関係する方へ】

本書は、歴史的な文法の専門書であるが、高校での古典文法がよく分からなかったという方にこそ、是非とも、読んでもらいたい。本書の第12章～第14章を読むだけでも、「なぜ古典文法が分からなかったのか」という理由がよく分かると思う。実は、「古典文法がよく分からなかった」というのは、自然な反応であり、むしろ、「古典文法がよく分かっている」ということの方が問題といえる。この意味で、国語教育に関係する方にも、当該の章を、是非とも読んでもらいたいと思う。本書は、古典文法教育が有する根本的な問題の一つに、確実に切り込んでいる。

「候ふ」や「です・ます」等の丁寧語、高校での古典文法教育、これらと中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系は、一体どう関係するのか。これらは、一見、全く関係がないように思える。

しかし、本書を第1部から順を追って読むと、これらは全て関係してくることがよく分かると思う。テンス・アスペクト・モダリティ体系は、動詞述語文の根幹をなすだけに、その影響は、思いのほか大きいものなのである。

目　次

まえがき iii

序章　本書の目的と意義等 …… 1
1. 本書の目的と意義 …… 3
2. 先行研究で明らかになっていることと、
明らかになっていないこと …… 6
2. 1. 先行研究で明らかになっていること …… 6
2. 2. 先行研究では明らかになっていないこと
―回答できない 11 の疑問― …… 8
3. 本書の研究方法の特徴 …… 13
4. 本書の研究史上の位置付け …… 18
5.「テンス」「アスペクト」「モダリティ」に関する
基本的な用語と考え方 …… 21
6. 本書の結論の一部
―近代日本語のスタート地点を記述して、
古代日本語から現代日本語までの体系の変遷を示す― …… 22
7. 本書の構成 …… 28

第 1 部
中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系を記述する …… 31

第 1 部について …… 33

第 1 章　中世末期日本語の〜タと〜テイル・〜テアル …… 34
1. はじめに …… 34
2.「存在様態」について …… 38

3. ～タが文末で状態を表している場合…… 40
4. ～テイル・～テアルが文末で状態を表している場合…… 45
5. 中世前期日本語の～タリが文末で状態を表している場合…… 50
6. 傾向の背景…… 52
7. おわりに…… 56
8. 付節　用例解釈の揺れや例外的と思われる例をどう考えるか…… 59
8.1.「強い解釈」と「弱い解釈」…… 59
8.2. ～タに見られる解釈の揺れへの対応…… 60
8.3. ～テイルに関する例外的と思われる例への対応…… 61

第2章　中世末期日本語の～テイル・～テアルと動詞基本形…… 63
1. はじめに…… 63
2. 中世末期日本語の～テイル・～テアル…… 67
3. 中世末期日本語の動詞基本形…… 71
3.1. 文末の場合…… 72
3.2. ウチ（ニ）節の節述語の場合…… 75
4. 考察…… 78
5. おわりに…… 80

第3章　中世末期日本語の～ウ・～ウズ（ル）と動詞基本形
―～テイルを含めた体系的視点からの考察―…… 82
1. はじめに…… 83
2. 仮説、及び本章の構成…… 85
3. 仮説の検証方法…… 87
4. 調査資料と調査対象…… 91
5. 原因・理由節の調査結果…… 93
5.1. 動詞基本形の分布…… 95
5.2. ～ウ・～ウズ（ル）の分布…… 100
6. 目的節の調査結果…… 103

6. 1. 動詞基本形の分布…… 104
6. 2. ～ウ・～ウズ（ル）の分布 …… 105
7. 動詞基本形が〈未来（以後)〉を表しにくかったことの背景 …… 107
8. 連体節内に～ウ・～ウズ（ル）が多用される理由 …… 111
9. おわりに …… 114

第 4 章　中世末期日本語の～テイル・～テアル
—進行態を表している場合を中心に— …… 118
1. はじめに …… 118
2.「具体的な動きのある進行態（動的な進行態)」と「具体的な動きのない進行態（静的な進行態)」について …… 119
3. ～テイル・～テアルが文末で現在の状態を表している場合 …… 122
4. ～テイル・～テアルが文末で過去の状態を表している場合 …… 125
5. ～テイル・～テアルが文中で状態を表している場合…… 127
6. 中世末期日本語の～テイル・～テアルの解釈の揺れ等に関する説明…… 130
7.「静的な進行態」の位置付け …… 133
8. おわりに …… 137

第 5 章　中世末期日本語のウチ（ニ）節における～テイルと動詞基本形… 138
1. はじめに …… 138
2. 時間関係を表すウチ（ニ）節の基本的な機能…… 141
3. 現代日本語のウチ (ニ) 節における～テイルと動詞基本形…… 145
4. 中世末期日本語のウチ (ニ) 節における～テイルと動詞基本形 …… 149
5. おわりに …… 156

第 6 章　中世末期日本語の～テアルの条件表現
—状態表現として解釈できない～テアレバが存在する—…… 157
1. はじめに …… 157

2. 先行研究のまとめ …… 158
2.1. 中世末期日本語の〜テアルに関する先行研究 …… 159
2.2. 中世末期日本語の条件表現に関する先行研究 …… 160
3. 調査概要 …… 163
4. 調査結果①―〜テアラバと〜テアレバの使い分けがある― …… 164
5. 調査結果②―状態表現として解釈できない〜テアレバがある― …… 169
6. 本章の結論と、それが意味するもの …… 171

第7章　中世末期日本語の〜タにおける主格名詞の制限について
―文末で状態を表している場合を中心に― …… 175
1. はじめに …… 175
2. 調査概要 …… 179
3. 調査結果 …… 181
4. 本章の結論 …… 184
5. 付節　主語の有生性と形式の関係 …… 185

第1部　付章　〜テアルの変遷 …… 188
1. 〜テアルの変遷を素描する …… 188
2. 本書の〜テアルの捉え方は、〜テアルの複雑な変遷の中でも、
矛盾がないものと思う …… 193

第1部のまとめ　中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ
体系の記述 …… 195
1. はじめに …… 195
2. 中世末期日本語の文末で状態を表している〜タと、〜テイル・
〜テアル、及び、中世前期日本語の〜タリの分布の異なり …… 195
3. 中世末期日本語の動詞基本形と、
〜テイル・〜テアルの分布の異なり …… 197
4. 中世末期日本語の〜ウ・〜ウズ（ル）と、

動詞基本形の分布の異なり …… 199
5. 中世末期日本語の～テアルの条件表現―～テアレバの解釈― …… 201
6. 中世末期日本語の文末で状態を表している
～タの主格名詞について …… 202
7. 中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系 …… 203
8.「なぜ、中世末期日本語において、このような体系になっているのか」ということに対する本書の見解 …… 204
9. 第1部の記述の妥当性
―歴史的な流れから見ても自然な体系の記述である― …… 206

第2部
中世末期日本語の体系を踏まえて
古代日本語から現代日本語への変化を読み解く …… 209

第2部について …… 211

第8章　従属節において意志・推量形式が減少したのはなぜか
―日本語の変遷を「ムード優位言語ではなくなる」という
言語類型の変化として捉える― …… 213
1. 中世末期日本語に着目して、
日本語の変遷を言語類型論的に捉える …… 213
2. 従属節の節述語において、
意志・推量を表す形式が減少すること …… 215
3. モダリティ（modality）とムード（mood）の定義 …… 216
4. テンス（tense）／アスペクト（aspect）／ムード（mood）の
いずれが優位か …… 218
4.1. 分類基準―義務的か否か― …… 218
4.2. 分類する際の注意点―あくまでも相対的な差である― …… 219
5. 古代日本語はムード優位言語である …… 220

6. 中世末期日本語は未だムード優位言語である
—ムード優位が崩れる兆しも見え始める— …… 226
7. 現代日本語はムード優位言語ではない
—テンス優位言語であろう— …… 231
8. 従属節において意志・推量を表す形式が減少したのはなぜか
—ムード優位言語の特徴を失ったことと、それに伴い、
従属節の従属度が上がったこと— …… 236
9. 本章のまとめ …… 242
10. 付節 1 研究の広がり—本章に関連する八つの研究— …… 244
11. 付節 2 アスペクト優位言語か否か …… 249

第 9 章 中世前期日本語の「候ふ」と現代日本語の「です・ます」の統語的分布の異なり—文中には丁寧語があるが文末にはない場合— …… 253
1. 問題の所在—歴史的にみた場合、丁寧語の統語的分布に異なりが見られるのか— …… 253
2. どの時代のどの形式を調査するべきか
—中世前期日本語の「候ふ」を調査する— …… 256
3. 調査概要 …… 258
3. 1. 中世前期日本語の調査概要 …… 258
3. 2. 現代日本語の調査概要 …… 259
4. 調査結果
—中世前期日本語と現代日本語とでは異なりがあった— …… 260
5. 現象の記述と考察、及びまとめ …… 266

第 10 章 中世前期日本語の「候ふ」と現代日本語の「です・ます」との異なり—「丁寧語不使用」の観点から— …… 272
1. 丁寧語を対照する …… 273
2. 現代日本語の「です・ます」の四つの特徴 …… 273
3. 中世前期日本語の「候ふ」を考察対象とする理由 …… 276

4.「候ふ」はデフォルト的な丁寧語ではない……………………279
5.「候ふ」は談話統一的な丁寧語ではない……………………284
6.「候ふ」は必要十分的な丁寧語ではない……………………286
7.「です・ます」と「候ふ」の違いのまとめ……………………290
8.「主節と従属節の違い」という観点からの考察……………………292

第 11 章　日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷
―どのようにして古代日本語の体系から現代日本語の
体系になったのか―……………………296
1. はじめに……………………296
2. 時制を表す形式のまとめ……………………297
3. 中世末期日本語では、使用されている形式は、近代日本語に近いものの、その体系の内実は古代日本語に近い……………………301
4. 古代日本語から現代日本語までの体系の変遷はどのようであったのか……………………305
5. 動詞基本形の意味の変化と、動詞基本形と対をなす有標形式の変遷について……………………307
6. ムード優位言語ではなくなるという言語類型論的な変化―ムードという文法カテゴリーの消滅―……………………309
7. ～ウ・～ウズ（ル）が多用されているのは従属節だけの問題ではない……………………314
8. 1000 年を超える壮大なスケールで繰り返される体系の中に連体節の現象を位置付ける……………………316
9. 状態性述語の整理……………………324
10. 近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷について考察を加える―テンスを表し分ける体系への変化―……………………328
11. 日本語の変遷を体系的にみることの重要さ……………………329
12. 付節　古代日本語の～ヌや～ツについて……………………330

第 2 部のまとめ　　古代日本語から現代日本語への変化……………………… 332

第 3 部

「国語教育」「現代日本語のアスペクト研究」「形式と意味の関係の記述方法」「日本語学史」への関わりを示す ……………………………… 339

第 3 部について………………………………………………………………… 341

第 12 章　「む」「むず」の違和感を「言語類型の変化」と
「テンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷」から説明する … 343
1. はじめに
—現代日本語母語話者がもつ「む」「むず」への違和感— ………… 343
2. 本章の四つのポイント…………………………………………………… 346
3.「む」「むず」の意味と古代日本語の言語類型
—〈非現実〉とムード優位— …………………………………………… 347
4.「ている」の発生とテンス・アスペクト・モダリティ体系の変化 … 350
5. 無標形式である動詞基本形の分布の変化
—〈非現実〉へのシフト— ……………………………………………… 353
6.「古典語独自の論理」とは何か
—本書の内容の教育への関わり— ……………………………………… 355
7. 本書の考え方は比較的新しいもの……………………………………… 357
8. おわりに—ワンピースの仮説— ………………………………………… 358

第 13 章　古典文法書間で「む」「むず」の記載内容はこんなにも違う・その
1 —「古典文法教育が苦痛であること」の本当の理由— ……… 360
1. 助動詞「む」「むず」の意味を説明できるか………………………… 360
2. 高等学校で使用されている古典文法書を調査する …………………… 363
3. 古典文法書の記載内容はまちまち……………………………………… 364
3. 1.「む」「むず」の意味に何をたてるか ……………………………… 364

3.2.〈仮定〉と〈婉曲〉を分けるか……………………………………………… 367
3.3.〈勧誘〉と〈適当〉を分けるか……………………………………………… 369
4.「古典文法教育が苦痛であること」の本当の理由
—調査結果から分かること— ………………………………………………… 370
5. 古典文法書の記載内容はなぜ多様なのか ………………………………… 371
6. ガイドライン作成の提案……………………………………………………… 376

第14章　古典文法書間で「む」「むず」の記載内容はこんなにも違う・その２—「む」と「むず」の違いを大学等の入試問題で問うことは妥当か— ……………………………………………………………………………… 379
1. はじめに—古典文法書の間で説明に差異がある— …………………… 379
2. 調査対象 ……………………………………………………………………… 381
3. 未然形の「ま」をたてるか…………………………………………………… 382
4.「ん」「んず」の表記に言及があるか……………………………………… 384
5.「む」と「むず」の意味に違いがあるとするか…………………………… 386
6. まとめと「む」「むず」にまつわる難しさの背景
—国語教育と歴史的文法研究の接点— ………………………………… 390

第15章　現代日本語の格体制を変更させている〜テイル・その１—「池に鯉が泳いでいる」「冷蔵庫にビールが冷えている」とはいうが「池に鯉が泳いだ」「冷蔵庫にビールが冷えた」とはいわない—…… 393
1. はじめに—格体制を変更させている〜テイル—………………………… 394
2. 格体制を変更させている〜テイルを研究する意義……………………… 395
3. 格体制を変更させている〜テイルに言及している先行研究………… 397
3.1. 杉本武（1988）………………………………………………………………… 397
3.2. 岡智之（1999）………………………………………………………………… 398
3.3. 安平鎬（2000）・加賀信広（2002）………………………………………… 399
3.4. 本節のまとめ…………………………………………………………………… 400
4.「格体制を変更させている〜テイル」の特徴………………………………… 401

5.「格体制を変更させている～テイル」には複数のパターンがある… 406
6. 存在表現としての～テイル …… 408
7. おわりに―「格体制を変更させている～テイル」の
アスペクト研究における意味― …… 411

第16章　現代日本語の格体制を変更させている～テイル・その2
―小説のデータを用いたニ格句の分析― …… 414
1. はじめに―格体制を変更させている～テイル― …… 414
2. 調査概要 …… 416
3. 調査結果 …… 418
3. 1.「歩ク」について …… 419
3. 2.「休ム」について …… 421
3. 3.「泳グ」について …… 422
3. 4.「死ヌ」について …… 423
3. 5. 本節のまとめ …… 424
4. 格体制を変更させている～テイル文の語順の傾向 …… 426
5. 格体制を変更させている～テイルの意味 …… 428
6.「格体制を変更させている～テイル」と
従来のアスペクト理論との関係 …… 430
7. おわりに …… 432

第17章　アスペクト研究における形式と意味の関係の記述方法を問い直す
―～テイルの発達を踏まえて― …… 434
1. はじめに …… 434
2. いつ頃から～テイルの例がまとまって見られるのか …… 435
3. 中世末期日本語の～テイルの表す意味は何か …… 439
3. 1. 動作継続を表している場合 …… 439
3. 2. 結果継続を表している場合 …… 442
4. ～テイルの発達から日本語のアスペクト研究を問い直す

―形式と意味との関係― …… 443
4. 1.　一般言語学的な手法 …… 444
4. 2.　個別言語学的な手法 …… 448
4. 3.　言語類型論的な手法 …… 449
5.　おわりに …… 451

第 18 章　モダリティの定義に二つの立場があることの背景―「意志・推量」「丁寧さ」「疑問」「禁止」の各形式の分布が文末に偏ってくるという変化に注目して日本語学史と日本語史の接点を探る― …… 455
1.　はじめに …… 455
2.　モダリティの定義には少なくとも二つの立場がある …… 456
3.　A の立場の前提と、A の立場の研究史上の位置付け …… 460
4.　意志・推量 …… 462
5.　丁寧さ …… 464
6.　疑問 …… 468
7.　禁止 …… 470
8.　モダリティの定義に二つの立場があることの背景 …… 473
9.　現代日本語のような構造に至るまでにどのような変化があったのか …… 476
10.　おわりに―多くの現象が緩やかに関連している「ワンピースの仮説」― …… 479

第 3 部のまとめ　「国語教育」「現代日本語のアスペクト研究」「形式と意味の関係の記述方法」「日本語学史」への関わり …… 482
1.　はじめに …… 482
2.　国語教育（古典文法教育）への関わり …… 482
3.　現代日本語のアスペクト研究への関わり …… 483
4.　形式と意味の関係の記述方法への関わり …… 484
5.　日本語学史への関わり …… 484

6. おわりに …… 485

終章 …… 487
1. 本書の目的の確認 …… 489
2. 中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系 …… 489
3. 古代日本語から現代日本語までのテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を見通す …… 491
4. 様々な現象がリンクしている …… 493
5. 記述上の 11 の疑問に対する本書の回答 …… 494
6. 本書の目的は達成できたといえる …… 502

参考文献 …… 504
調査資料 …… 552
既発表論文との関係 …… 556
研究の引用にあたって …… 561
あとがき …… 562
謝辞 …… 565
索引 …… 568